

# 「復活の光から見える」

ローマの信徒への手紙 4章 23 - 25節

森島 牧人 牧師

今日はイースター、主の復活を祝う日です。キリスト教と聞くと、大多数の人がすぐに思い浮かべるのはクリスマスと十字架だと思われませんが、世々の教会は、キリスト教の中心は復活すなわち〈復活信仰〉にあると言っています。

主イエスも弟子たちもユダヤ人ですが、ユダヤの民のユダヤ教では創世記の天地創造の記述から土曜日が〈安息日〉になっていて、礼拝もその日に行われて来ましたが、そのような中で、主イエスを救い主とするキリスト者の群れはユダヤ教を離れ、主が復活された日である日曜日を主日とし、「主に栄光を」という礼拝をささげることになります。

ここに一つの疑問があります。各福音書の終わりには主イエスの十字架の出来事が記されていて、主イエスの十字架の刑は確かにあったと分かりますが、いずれの福音書にも肝心の主の復活を喜ぶ記述がないのです。主の昇天後35年ごろに書かれた最初の福音書であるマルコ福音書は復活について、次のように記しています。それは、〈安息日の終わった早朝、すべてを失い茫然自失の弟子たちを残して主のご遺体を浄めるために墓へ急いだ女たちが墓へ着くと、墓の入り口を塞いでいた大きな石は動かされていて、中に入ると主の亡骸はなく、代わりに白い衣を着た若者がいました。若者は女たちに「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。・・・さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」女たちは墓を出て逃げ去った。震え上り、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである（マルコ16：1-8）。〉というもので、聖書記者はこれをこの福音書の結びとしています。ここを読んでも、主の復活など誰もが夢にも思わず、予想だにできなかったことが分かります。そしてこれが福音書の結論でした。

人間には理解できない、誰も受け止め得ない、だからこそ人間によるのではなく神の出来事であると言えるかと思いますが、この時の弟子たちや周りにいる人々の置かれた状況は、私自身のことを考えると分かるような気がします。牧師の家庭に12月20日に生まれて「牧人」と命名された私は、教会は私であり私は教会であるというような中で育ちますが中学生のころ、「復活」が信仰の障害物として姿を現します。何故イースターが祝うべきことか分からずバプテスマへと進めない状態で高校生に、そして大学受験が近づいて来ましたが、疑問を抱えたまま、取り敢えずの思いで、高2でバプテスマを受けますが、問題の解決は見られず、大学受験にも失敗します。挫折の中、この疑問から逃げるわけにも行かないと覚悟した私は、何か答えを得られるかもとの望みを持って翌年、東京神学大学へ飛び込んだのでした。つまり、主の受難と十字架刑の予告を三度も耳にしながらか、それを全く理解せず、主の捕縛の際には蜘蛛の子を散らすように逃げ去った弟子たち同様、この時の私も〈復活〉が分からなかったのです。あれ程にも愛された弟子たちが一人もいないゴルゴタの丘の十字架の上で、神にも見放された主イエスは、一人で地上の命を終えられたのでした。

今教会ではマルコ福音書を学んで来ていますが、分かり始めたことは、福音書はイエスの伝記ではないということです。マルコ福音書にはクリスマスの記述はなく、復活の出来事についても不十分です。私が、聖書はイエス伝ではなく、正にこれこそが復活であり、〈福音〉なのだとしこく分かって行ったのが、復活への疑問を持って入った神学大学の学びに於いてでした。幼い日からバラバラに聞き知っていた多くの聖書物語、その物語の全てを扇の要のように一つにしているのが、「復活の出来事」であると理解して行ったのです。

この扇の要である「復活」の地点から見る時、神を裏切り樂園を追放されるアダムとエバに神が着せられた羊の皮の衣、自分の息子イサクを失うのではとの不安の中で「主の山に備えあり」を理解したアブラハムに備えられていた雄羊、いずれの場面でも羊が殺されています。本来なら殺されるはずの私たちの代わりに〈あの方〉があの方で殺された・・・その死の中で私たちは、神がアブラハムやヤコブにされた祝福の約束を私たちにもしていただいていることを理解しているのではないかと思います。

この1年間、「主の山に備えあり」をテーマとして、共に聖書を読んで行きたいと思います。

(説教要約 羽入田悦子)